

〈講演会〉

2008年度 大学院経済学研究科主催

講演会『経済倫理：あなたは、なに主義？』

日時：2008年9月27日（土曜）15：00—16：30

場所：龍谷大学深草学舎：3号館1階101教室

論題：『経済倫理：あなたは、なに主義？』（講談社メチエ）合評会

著者：橋本 努（北海道大学大学院経済学研究科）

討論者：村澤 真保 呂（龍谷大学社会学部）

篠原 雅武（日本学術振興会特別研究員）

水 溪 悠 樹（経済学部4回生）

司会：小 峯 敦（龍谷大学経済学部）

主催：龍谷大学大学院・経済学研究科

後援：龍谷大学経済学会

対象：学部生・院生，および研究者を含む一般聴衆

備考：入場無料，予約不要

〈はじめに〉

（小峯） 皆さん，おはようございます。司会の小峯と申します。龍谷大学経済学部に勤めています。今日は講演会・合評会にお集まりいただきまして，誠にありがとうございます。今日は「経済倫理，あなたはなに主義？」と題します。主催は龍谷大学大学院・経済学研究科，後援は龍谷大学の経済学会です。この催しは90分間，4時半までに終わります。まずは講師の方々を紹介して，その後，講談社から出たこの本『経済倫理，あなたはなに主義？』がありますので，各コメンテーターが討論して頂きます。その前に橋本先生からこの本のエッセンス，一番大事な第一章について若干まとめて発表して頂きます。その後，各討論者がコメントをした後に，リプライをして，その後にここが大事ですけれども，学生さんたちにアンケートをする時間も設けております。皆さん橋本努と題されたレジメをもらいましたか。一枚ものの，そこにアンケートがありますね。4つの経済問題に答えていくというものです。裏の方にも主な争点というのがあります。それを見ながら考えつつ，我々の発表を見てみましょう。

〈講師の紹介〉

それではまず、私の方から講師の紹介させていただきます。私は先ほども言ったように、この大学の経済学研究科の小峯です。こちらの方から北海道大学の大学院准教授の橋本努先生です。北海道からわざわざお越し頂きました。経済思想・社会哲学というのを専攻し、お若い時代から大著『自由の論法』であるとか『社会科学の人間学』であるとか、そのプロフィールは皆さんの手元にありますので、そちらの方を見て頂きたいですけれども。その中で、『自由に生きるとはどのようなことか』といううちま新書の本も出されて、学生さんあるいは若い社会人向けにも書かれています。またハイエク論、マックス・ウェーバー論にも非常に造詣が深く、現在までリベリズムに非常にこだわりを持って、若手、あるいはもう中堅になられるかな、日本の思想界で中心的な人であります。その人が書かれた経済倫理の本を、今日は合評という形で我々がコメントを付けるということをしします。

そのコメンテーターの第一番目、村澤さん。この龍谷大学の社会学部の准教授であります。社会学を専攻されていて、たとえばタルドの『模倣の法則』とか、あるいは『排除型社会』などいくつかの翻訳をされたり、いろいろな論文「食の倫理」「差異・反復・権力」という論文などを多数発表されたりしています。二番目のコメンテーターとして篠原さんをお呼びしました。京都大学大学院出身、いま日本学術振興会特別研究員で、ついこの間、非常に大きな著作『公共空間の政治理論』を発表されました。政治思想・都市論という、ちょっと難しげですけれども、そういったことを専攻されています。最後に学生の方にも是非コメントをしてほしいということで、私の授業をたまたま履修していた水溪君、龍谷大学の四回生です。ですから君たちの二年くらい先輩にあたりますけれども、大前ゼミに入っております。若者の労働問題などに関心があり、来年度から大学院に進学予定です。では講師の皆さん、一言だけ。

〈ひとこと〉

（橋本） 橋本です。お忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。のちほど少し簡単な講義をさせていただきます。

（篠原） 篠原と申します。今日はいろいろとコメントする中で、橋本先生と皆さんと議論を深めていければいいなと思っております。よろしくお願いします。

（村澤） 村澤です。同じ龍谷大学ですけど、たぶん学生さんは私と面識がないと思います。瀬田学舎といいまして、大津の方にいつもいて、こういう形で深草学舎でお話できるのは初めてなので楽しみにしております。

（水溪） 水溪です。この中では唯一専門家ではないので、会場の皆さんからの質問が途切れた時

に、バンバン質問をする役で来ました。よろしくお願いします。

(小峯) ありがとうございます。ではさっそく橋本先生から、10分から15分かけて、この本のエッセンスを、特に学生さん向けに話していただきたいと思います。特にレジメをご参照ください。それではお願いいたします。

〈感覚の経済バージョン〉

(橋本) よろしく申し上げます。先ほど、小峯先生の方から褒め殺しにあいまして、実は小峯先生の方が私より全然有名な方なので、お間違いなく。『あなたはなに主義？』というのが本当のタイトルだったのですが、ちょっと恥ずかしすぎて、最初に経済倫理と持ってきたのが本心です。何主義と聞かれたら、皆さんどういうふうに答えますか。例えば戦時中の日本、それはある種の軍国主義だった。それから戦後になって日本社会はどうなったかという、例えばある種のスポ根、スポーツ根性物の漫画が流行りましたよね。スポーツ根性主義の若者が増えていった。それからその後には「明日のジョー」みたいな、僕らの世代はまさに明日のジョー世代ですけども。それは何と言うのかな、真っ白な灰に燃え尽きろ、燃烧型の溶解主義みたいな、あるいはその後、フォーク全盛期になり、やっぱり四畳半フォーク、つまり恋愛して四畳半で同棲しようかなみたいな、恋愛至上主義が生まれたりですね。1980年以降の若者になると、あの人マザコンなんじゃないの？ みたいなマザコン主義が流行ったり、社会問題化したりするわけですけども。

皆さんの普段の生活の中で、自分が例えばオタクだとか、何とか主義とかは意識しないかもしれませんが、他人に対してはそういう事を言っちゃうことがあると思うのですよね。あの人にはファシストだというように。このような感覚の経済バージョンで今日は考えてみたいと思います。普段恋愛していても、うまく自分は恋愛できないという時に、どうしたらいいのか、そこでいろいろな行動をしたいと思います。それと同じようなことで、今の日本社会も、どのように政治や経済を運営していったらいいのか、右往左往しながらやっていると思うのです。

今日は手元にレジメをお配りして、そこに ABCD の問題を皆さんに簡単にお答え頂くと、それが何主義かに分類されます。問題が4つで X か Y かを選ぶと、答えが16パターンありますので、それに応じて何主義かとなります。これは後で解答をお配りしますので、判断していただきたいですね。本当は授業で私がやる場合には男女ペアになって、お互い何主義だったかを披露しあって、そこで議論をしてもらう形式をとっていますが、今日は10分で簡単にお答えいただきたいと思っています。

〈利益 対 道徳〉

最初に A という問題がありますけれども、企業は短期的には損失を被るとしても、あるいは社員に不利益を強いるとしても、長期的な視野に立って道徳的に行動すべきでしょうかという問題です。一番典型的なのは、ライブドアのホリエモンという元社長が、ネクタイもしないで、普

通にマスコミに出てきて、既存のサラリーマンというか企業というのは全然、既成観念にとらわれては駄目だ、自分みたいな気概をもった人間が新しい日本を造るのだ、と活躍しました。結局は捕まってしまうかもしれませんが、もし捕まらなかったらどうですかね、皆さん。ホリエモンって評価しました？ もし評価するならば、道徳的に行動すべきかどうかに関して、答えはノーということになります。裏を見ていただくと X を選ぶってことになります。

でもやっぱりホリエモンって最初から怪しいよなって思っていた、だからやっぱり捕まったのだ、ざまあみろみたいな。やっぱり道徳は重要だと、ネクタイするのはサラリーマンには重要だし、それから年中行事ですね、年始の挨拶まわりだとか、言葉遣い、敬語をしっかり使うだとか、そういったビジネス倫理、普通のサラリーマンのマナーというのはちゃんと身につけたい。髪型も卒業したらいわゆるサラリーマン型の髪型にして、そうした方がやっぱり商売や取引はスムーズになるだろう。あまり格好つけないで、まあ普通のスーツも一番地味なスーツを買って、もうバリバリのサラリーマンですとなって、道徳的にふるまいたいと思いますよ。その場合には Y を選んで頂きたいと思います。

〈公正 対 安定・成長〉

他にもいろいろ問題はあるのですが、今日はエッセンスだけ B の問題に移って考えてみたいと思います。いま皆さんに A の問題で、X か Y か、もちろんその微妙という人もいらっしゃると思います。X と Y の中間ぐらいかなという人もあえてどちらかを選んでください。○と×で強いのがちょっと難しいなと思ったら、X の方に△とか Y の方に△とかという形でかまわないのですが、いずれにせよ選んで頂きます。

B の問題で、経済政策や制度の理念として公正と秩序の安定・成長のいずれを優先するか。これはちょっと難しいので、具体的に考えて頂きたい。所得税の問題にしましょう。いま税率は累進的で、金持ちになれば所得税は高く、最大40パーセントぐらい徴税されますが、やはりこれはどうでしょうか。貧しくても金持ちでも、ある一定の税率で取った方がいいという考えもありますよね。もう皆さん、同じように生活して日本社会にお世話になっている。例えば一律10パーセントで取った方が、公平ではないかという考え方もありますよね。逆に、金持ちになればなるほど高く税を取るべきだという考え方もありますね。これは平等というより公平という考えに基づくと思います。平等主義者はお金も、例えば2000万持っている人からは、税金1500万くらい取っても良いのではと考えるでしょう。これもまた公正あるいは正義という考えですね。所得がどうであれ所得税率は一律10パーセントというリバタリアン、あるいは所得を実質的に平等にするという平等主義者、まあどちらも極端な発想ですけども、公正が重要だと思う方は B の問題では X を選んで頂きたい。

そうではなくてやはり税金の問題は、日本社会を安定させるかどうかが重要なのだと。あまりにも金持ちからお金を取りすぎると、金持ちはアメリカあたりに行ってしまうじゃないかと。あるいは金持ちから税金を取らなさすぎると、それは不公平で不満が続出してしまう。そういう場

合は社会統治上の問題が生じてしまいますね。だからやはり統治の基本は何か、それはお金持ちでない人が不満を言わない程度に税金を取る、あるいは金持ちが外に逃げない程度に税金を取るという。問題は秩序が安定するように税金を取れば、それが一番平和な社会なのだと思う人は、この場合 X を選んで下さい。ちょっと難しかったかもしれませんが、要するに何か問題が起こった時に、秩序を優先するか原理を優先するかどうかですね。

〈銀行救済の例〉

もう一つだけ別の例を出します。今、アメリカでサブプライムローンが問題になっていますね。銀行がつぶれた場合に、政府は救済すべきだと思いますか。銀行業というのは他の商売と同じで、つぶれたら倒産という手続きをすればいいのでは、原則的にはそういうふうに言えると思いますね。日本でも10数年前にバブルが崩壊して、その後に銀行の経営破綻が明らかになったとき、りそな銀行を救済して北海道拓殖銀行は救済しなかったという同問題がありました。もしここで皆さん、アメリカ政府がサブプライムローン問題でつぶれそうな銀行を救うべきだと思う方は Y を選んでください。それはどうしてかと言うと、銀行つぶれると、もうどんどん他の銀行もドミノ式に倒れてしまうから。そうすると経済が回らなくなってしまう、お金が借りられなくなってしまうと経済が急速に収縮してしまいます。だから秩序の安定を優先するのであれば、たとえ多くの銀行では、金持ちからの大口の預金で成り立っているのですけれども、金持ちの預金もちゃんと保証して、秩序の安定を重視する。

そうではない。銀行はやっぱり潰れるべきで、誰が損をするかという、やはりお金持ちですよ。そこにお金を預けている人たち。だからサブプライムローンで銀行が潰れてお金持ちが損してごまあみろ、それでいいじゃないか、それが公正なのだと。そういうふうに思う方は X の方に○をして下さい。もちろんいろいろ迷うでしょうが。

〈自由か連帯か〉

C の問題にいかせてもらいます。企業が連帯的ないし家父長制的な組織を保持したい場合には、それを自由に認めるべきでしょうか、という問題ですね。それともどの企業であれ、組織内部において開かれた人間関係を構築すべきであろうか、という問題です。具体的な問題としては、例えばセクハラの問題を考えてみたいと思います。うちの企業にはセクハラはありますけど給料は高いですという企業があったとしましょう。このような企業は認めるべきだと思いますか。あるいはうちは女性はお茶くみだけですとか、女性はちょっと給与的に差別していますという所があったとしましょう。そういう企業は認めるべきだと思いますか。

いや、そうじゃない、どんな企業もセクハラは絶対にいけないのだから、原則的にそれは家父長制的な組織というのは駄目、やっぱり法の介入というのは組織も認めなきゃいけない、というふうに考える場合には、C は Y を選んで下さい。いや、そうじゃなくて企業は、それぞれ自由にやっているのだから、その企業の内部にまかせればいい、いやなら辞めろ、セクハラがいや

だったら別の企業に行けばいいんであって、企業それぞれがどういう企業組織を運営するかは自由だ。自由は重要だ。それは家父長制であれ独裁制であれ、それは自由なのだ、独裁的にやりたい中小企業の社長が、自分は独裁者になりたいから中小企業を運営しているのだ、それで潰れる場合も自己責任だ、と思う方は X を選んで下さい。

別の例をもう一つだします。談合問題です。談合ってというのはやっぱり、地方では当たり前のようにあったのですね。それこそ江戸時代からずっと続いてきた。これはもうしょうがないのであって、それぞれの地域の事情に任せましょうという方は X を選んで下さい。いやもう談合は絶対に許せないという方は Y を選んで下さい。これが C の問題です。

〈金儲けと倫理〉

そして最後に D の問題です。企業は基本的には金儲け第一主義で行動して良いのでしょうか。それとも社会全体の中に倫理の一翼を担う存在として包摂されるべきででしょうか。ちょっと難しいので、また具体的な話をしてみたいと思います。まず D の表の方を先にご覧ください。裏をめくって頂くと、D のところに(1)、(2)、(3)、(4)と分かれています。信条家・願望家・利己主義者・倫理家です。いま皆さんに選んでもらっているのは、自分だったらどうするかということよりも、むしろ社会的にどうあるべきか、この日本社会がどうあってほしいか、あるいは皆さんのまわりの人たちがどういうふうに動いてほしいかという問題です。例えば(1)は自分だったらゴミは捨てません。自分は信条的に倫理的に生活したいなと思っている。他人に迷惑をかけた生活はしたくない。例えば環境に配慮した生活をしたいなと思っている。だけど他人に対してそれは強要しないよという人、それは信条家です。とにかく自分はやる。だけど他人にはいちいちおせっかいはやかない。自分は煙草を吸わない。でも煙草を吸っている人は、別にまわりにいてもそれはいいかなと思う。信条としてポリシーとして煙草を吸わないとか、ゴミは捨てないとか、エコロジカルな生活とか、いろいろあると思うのですが、他人に何も言わない、ひそかに自分で信条を持っているという方は(1)です。

(2)の願望家とは、それにプラス、やはり自分みたいな人間がたくさん増えてほしいな、長期的に環境に優しい生活をする人が増えてほしいなとか願望する。ただ政府に何も言わない。政府にこういう事をやって欲しいとか、ああいう事をやって欲しいっていうことは言わないで、ただ願望としては、希望としては、環境に優しい企業が長期的に伸びて行ってほしい、そういうふうと思う方は(2)を選んで下さい。(3)は利己主義者、とにかく企業は市場で儲ければそれでいいのであって、みんなエゴイスティックに利己的に生きればいいじゃないか。これはアメリカの株主優先型の社会。株式会社って何ですか。株主の物です。株主が儲かればいいのだという考え。それで市場に充分に貢献しているのだから、それで良いという考え方の方は(3)になります。そうじゃなくって(4)というのは倫理家ですが、やはり政府に何とかしてほしい。ゴミ問題であれば、やはり分別収集をやってほしいとか、それから企業に対して様々な規制をかけてほしい、投機マネーに対しても規制をかけてほしいとか、あるいは企業が解雇する場合には、なるべく解雇しず

らいようにして国民生活を守ってほしいとか、様々なことを政府に求めて政府にしてもらう、それによって、国家にある意味おんぶに抱っこと言えますが、国家が市場を規制していく社会が望ましいと思う方は(4)に○をして下さい。この場合(4)がXで、(1)(2)(3)がYという分類になるのですけれども。

それでいかがですか、皆さん。ABCD とそれぞれ X か Y か、例えば A は X、B は Y、C は X、D は Y、そういう感じで選んで頂きます。実は時間の関係で説明していないところが、B のところではありますが、もし質問があれば受け付けるという形で、非常にラフで直感的でかまいませんので、何か選んでいただいて、そしてアンケートしてみたいと思います。皆さんの中で多数派の意見というのは、どういう類型に、どういうパターンになったか、あるいは自分は本当に自分の思っていた何とか主義に合うのかな、ということを後で皆さんと一緒に議論してみたいと思っています。

(小峯) はい、ありがとうございました。皆さん、分類はやってみましたか。もうちょっと考える時間はありますので、4つの問題に関してXかYのどちらかを決めてみて下さい。後で一枚レジメを配りますので、それで何主義というのが自分で出てきます。それをちょっと楽しみにしてみして下さい。ではさっそく、村澤さんの方からこの本全体、あるいは今の発表についてコメントであるとか、質問であるとか、あるいは自由に10分ほどよろしくお願いします。

〈社会学の立場から〉

(村澤) 私の立場も言ったほうがいいですかね。私の場合は正確にあてはまるものはなかったのですけれども、おそらく近いのは地域型コミュニティアニズムではないかと思います。つまりYXYX という結果ですけど、最後のCのところはかなり悩ましいところがありました。まあ、それで私の立場と、なぜこういう結果になったのかということと、橋本先生の本について思ったことを自己紹介がてらお話ししたいと思います。

実は私は社会学という学問に所属しておりまして、まっとうな社会学者ではないのですけれども、社会学がどういうものなのか、ご存知ない方もいると思いますので、ちょっと簡単に二、三分説明させていただきます。社会学というのは、実は経済学と裏表なところがあります。産業革命の後、自由主義が広まって、平等を求めて革命が起こって近代国家ができた。その時に、それまでの王様が支配していた社会ではなくて、新しく人民が人民のために自分たちで治めるような社会のあり方はどうあるべきか、社会は何に従うべきかという問題が起こってきました。かつてはキリスト教が社会をまとめる原理でした。しかし、近代になって新たにきちんと制度を作って科学的・合理的に運営しようという、合理主義というものが指針となりました。

もう一つの指針は功利主義です。つまり、みんな利益を求めて、自分の好きなように動けば良いのだと。これは個人を中心とする考え方です。その時に合理主義とか功利主義とかにもとづけば、人々が集まってちゃんとした社会になったのかというと、実はそうじゃなかったわけです。

自分の利益を追求するバラバラな個人を、国家が法律を定めて縛り付けることはできます。しかし、人間世界はそれだけで成り立つわけじゃない。人間というのは利益とか合理性とかとは別の、もっと大事なことを信じているのではないか。みんなをまとめているのは、そのような何かなのではないかと思われました。かつてはそれが宗教でした。でも宗教が力を失った今、新しい統合の原理を考えなければいけないと、オーギュスト・コントという思想家がそうに提唱したのは、もう200年近く前になります。

そこからそれをずっと引きずっているのですね、社会学というのは。個人の利益、法律、あるいは合理性などとは別の原理で世の中はできている。それは何かというと集団とか人間関係の中で、お互いがお互いを大事にする、尊重する、そういう別の価値観がそこにあるのだと。社会学はこのようなベースに乗っかっています、学問自体がね。

〈答えづらい問題〉

そうしますと一番辛い質問がCなのです。このCは「自由な関係性／人為性なりベラル制」という二者択一です。社会学には、一方では「人々がそれぞれ集まって独自の社会を作る、どんな企業でもそうですけど、それぞれ独自の集団が成り立っている、それは尊重しないといかん」という暗黙の前提があります。他方、けれども差別は問題だろう、やっぱり平等でなくてはいかんという近代主義の前提もあります。ここはXを選んでいいかYを選んでいいか、非常に悩ましいところでした。私としてはそれぞれの集団の価値、みんなのその下に信じて集まっている価値観を大事にしなければならないということで、CについてはどうしてもXを選ばざるを得ないかなと。

残りのことを言いますと、社会になりうる一つの集団それ自体を尊重すると、それを破壊するようなものに対して否定的になります。つまり個人が自分たちの利益を勝手に追求して集団の成り立ちを壊すようなことを認めるべきではないという道德主義的な考え方にもとづいて、AはYを選びました。Bに「原理としての善／秩序としての善」というのがありますが、私個人がマルクス流の考えにもとづいていて、やはり公正というのは大事だろうと思っていますので、ここは個人的にはXを選びました。

Cはさきほど言いましたから、Dですね。包摂主義と非包摂主義があります。AとDはかなり近いところがあると思いますが、どんな個人であれ企業であれ、全体の中に組み込まれるべきだと考えると、やはり包摂主義ですね。企業活動も倫理的な国家の中に位置づけられなければならないと、そんなふうに考えてしまいます。そうすると私自身は全然意識していなかったのですが、地域型コミュニタリアニズムに分類されてしまいました。ちょっとショックです。

このように橋本先生の本は、自分が世の中こうあるべきだと思っていた、例えば私は政府などいらないアナーキストだと思っていたにもかかわらず、実はそうじゃないところに分類されてしまうという、そうした衝撃があって非常におもしろい。しかも授業用の教科書としてこの本を書かれたようで、普段私たちが生活をしていていろいろ悩むところから出発しています。皆さんも

いろいろ悩みますよね、恋愛とか、授業の単位が欲しいけど面倒くさいなあ、出るのがいやだなあ、とかですね、誰だって葛藤があると思います。その多くの葛藤は、個人と全体、つまり自分と社会全体との間の矛盾、例えば自分が社会とうまく合っていないとか、あるいは社会が自分の思い通りにならないとか、そういう矛盾から出てくるものだと思うのです。例えば私は自由に生きたい、でもお金が全然ないから自由に生きることができない、しかもそれは社会の仕組みでそうになっている、許せん、ということで革命家になる人もいれば、場合によってはそこから犯罪を犯す人もいるだろうし、あるいはそこで鬱病になる人もいるだろう。そういう社会と自分、国家と自分、世界と自分の間の矛盾というのは誰でも抱えているでしょう。そこからじゃあ自分はどうしたらよいのか、この世の中どうあるべきだと考えるのか。どんな思想でもそこから始まると思います。その意味では皆さん、あるいは私たちも含めて、自分がどのような思想を持っているのかを考え直す良いきっかけになる本だと思います。

〈質問〉

ここで橋本先生に質問です。近代以前の社会というのは、具体的な人間関係の延長線上に全体の秩序がつくられていますよね。例えば父親がまず家族の秩序になっている。さらにその父親たちが集まって村長を選ぶ。つまり、父親のさらに父親が村長になる。それをずっと登っていくと国王に行き着く。このように自分が生活している世界の延長で、原理や秩序を考える仕方を橋本先生は同形性の論理とおっしゃっています。そして先生の本も、自分の経験している世界や人間関係のあり方、価値観というものの延長で世界をとらえると、私は何主義かが自然に明確になるようにつくられています。

しかし他方で、マスメディアという情報を通して、非常に抽象的なニュースを私たちは日々聞いています。例えば世界の飢餓問題にせよ、エネルギー問題にせよ、どれも自分の経験、つまり具体的に見たものじゃないですよ。そうした情報は直接的に見たり感じたりできるものじゃなくて、あくまで知識として与えられるものです。そうであれば、全体社会の秩序や原理という抽象的レベルのものと、自分の経験の延長線上で捉えられる社会の秩序や原理という具体的なものとは、最初から矛盾しているのではないかと。近代社会においては統治の仕組み、政治の仕組みからして、自分の親父の延長として総理大臣がいるわけじゃなくて、全体と個人の関係が抽象的なものと具体的なものとしてはっきり分かれている。しかし、思想を持つということは、やっぱり自分の経験をもとに、その延長で世界を考えようとする試みだと思います。こうした矛盾について橋本先生がどう考えていらっしゃるかということの後でお伺いしたいなと思っております。

（小峯） ありがとうございます。さっそく篠原さんの方にいきましょう。

〈迷う問題〉

（篠原） 僕自身はこういうのをやらされると、自分自身は非常に優柔不断な人間なので、一つ一

つどっちなかと考えてしまいます。そのため今日は明確に何が出てきたということは言えないのですよ。どういうところで悩んだかっていうのは、まず一つ具体的にしゃべってみます。さらに他にちょっとこの中で挙げられていることはまた別に、ある本を読んでいた時に似たような事を考えました。その事をしゃべって、橋本さんの話を伺ってみたいと思います。

この ABCD の中で、僕が一番うーんと悩んだのは C ですね。自由な関係性、連帯もしくは個人の自己責任というところですよ。僕自身いろいろ考えていて、やはり今現在の世の中は、非正規雇用という典型なのかもしれないのですが、個人個人がばらばらにされていて、ということが一つ問題だと思うのですよ。やはりその連帯できない。だから自分自身、労働現場でひどく大変な状態にあってもその悩みを共有できないとか、具体的に訴えることができない、個人個人がばらばらにされていくっていうのが一つあるっていうのを考えると、やっぱりこの部分、連帯の価値を守れというのは、やはりしっくりくるのですね。

〈アルバイトの体験から〉

ただ、自分の経験をしゃべるのは本当は嫌なのですけども、あえてしゃべると、僕自身、今はバイトしていませんが、昔塾でバイトをしていたことがあったのです。塾のバイトはやったことのある人はわかるかもしれませんが、個人経営の場合だと塾長の意向というのは本当に反映します。やっぱり働いている側の方が不自由になるというか、だから何か教えるっていう時にも、定められたことから逸脱するのは非常にやりにくい。何というのかすごくこじんまりとした塾だったということもあって、共同体の重荷でしょうね、それが非常に嫌だったことがありました。

内部告発は背徳行為かどうかというのが本書に書いてありますが、内部告発したいことが沢山ありすぎたっていうくらいで、僕はその塾を辞めてしまいました。とにかくそうした具体的な経験から照らしても、内部告発者を救済せよというそちらの方がしっくりする時もありました。こんなふうにはいちいち考えていくと、立場を一貫させるということが難しいことかなと思ったのです。それは水溪さんのレジメの後半部分でも書いてあって、たぶんまた後で彼の方からこの話が出ると思います。だから本の主旨に反してしまうかもしれませんが、一貫した立場にどれだけ僕たちはとれるのかというのが、一つ課題として出てくるのかなと思います。

もう一つ、この本のテーマは一貫した立場を形成すること、一貫した主義主張によって多くの人を説得するという、それが重要だとあります。つまり自分自身持っている、例えば僕みたいな優柔不断な人間が曖昧な状態を脱却して明瞭な意見を持つと、それが重要となります。仮に僕が明瞭な立場を持ったとしても、現実には僕が行っている行動と主義主張というものがずれる、ないしは乖離する、矛盾するということもあると思います。その一つの例として、たまたまこの書評会に呼んでもらったので、現代の経済の問題を具体的に考えた方がいいでしょうか。

〈暴走する資本主義〉

ロバート・ライシュが書いた『暴走する資本主義』という本が最近翻訳で出て、これは読んだ

方がいいかなと思って読みました。この人の立場自体どう評価されるのかは僕にはわからないのですけれども、中に一カ所これはおもしろいなと思った見解があったのです。ライシュは現代の資本主義の中で生活すると、一貫性を持ちにくい、二面性を持たざるを得ないと言うのですね。どういうことかという読み上げますね。「つまるところ、消費者や投資家としてのすばらしい取引は一体どこから来たと考えればよいのだろうか」とこう問います。すばらしい取引、具体的には消費者としてのすばらしい取引は安いものを買うことですよね。ライシュが挙げるのはウォルマートなどですが、日本でもビックカメラとかすごく安いじゃないですか。なぜあんなふうに安くなるのかを考えてみるといいと思うのですよ。パソコンでもプリンターでも安く物が買える。そうした時に価格が下げられているのは何によるのか。ライシュはこう言います。その一部は低賃金からである。低い賃金や福利厚生に甘んじなければならぬ労働者、安い給料に移らざるをえない労働者がもたらしてくれたものだ。その他には一般の小売店よりも安い商品を提供して商店街を荒廃させる量販店、ビックカメラなど、そういった量販店からもたらされたと言えます。一部は地域社会への忠誠心をかなぐり捨ててインドネシアで十二歳の子供を低賃金で働かせるグローバルサプライチェーンへと変身した企業がもたらしてくれていると言っています。

つまり僕らが物を安く買うことは、それが低賃金の代償としてしていることですよね。例に出ているのはインドネシアの子供なのですが、おそらく今現在、日本では派遣の問題がありますよね。日雇い派遣で送り込まれていく工場労働という、大変なものの代償として安い物を買っているのかもしれない。僕たちは消費者としてはこれで満足してしまうかもしれませんが、でも反面、例えば以前秋葉原であった事件を引き合いに出して申し訳ないのですけれども、ああいう事件を聞くと低賃金の辛さというものに憤りを感じてしまう。その消費者として満足しつつも、こんな事件に面して話を聞くと、うーんと悩んでしまう。

自分の行いがもしかしたら、こうした事件や構造をもたらしめているかもしれないのに、そういったことをちょっとすっ飛ばしてしまうと、二面的にならざるを得ないのではないか。その間の矛盾をどうやって穴埋めするかということは難しいと思うのですよ。だからこういう低賃金を救えという話になったら、じゃあ安い物は買わなければいいのかとはならないと思います。このような難しい問題があるという話があって、そのへんが難しいのかなと思いました。

〈原理か秩序か〉

もう一つ、これは本の中に入りますが、この表の B です。原理としての善、秩序としての善という対比があります。公正的原理派は経済秩序を収縮崩壊させるとしても公正を貫くという話がありますよね。それに対して秩序派という主張が出てきます。これは僕があまり経済をやっていないので、こういう発想が間違っているのかなと思いつつ、次のようにも考えられないのかなとも思います。本の中でも低所得層の厚生水準の悪化という話がありますよね。厚生水準を良くするには、高所得層を利することによってしか可能にならない。つまり弱者を救うには強者を一層救わなければならない、という主張がありますよね。それだけなのかなと思ってしまふの

です。要するに低所得層の厚生水準を良くすることと、いわゆる低所得層の厚生水準が悪化するの、現在の経済秩序を維持することの代償として出てきている。つまり高所得者を利することが低所得者の厚生水準を悪化させていることがあると思うのです。だから逆に言えば、高所得層を利さないで低所得層だけを利することを考えることは誤りなのかですね、僕が言いたいのは。

つまり強者を救うことなく弱者を救うという提言をすることは、この本の立場からするとどう考えたら良いのでしょうか。なぜかと言うと、例えば政府が行う政策によって高所得者を利することによって低所得者も利するということだとしたら、低所得者だけを利しようとする物もあると思うのです。ひどく突飛な話ですけど、ガンジーが「塩の行進」を行いましたよね。まさにガンジーはイギリス政府が現行の体制としてあって、イギリス政府は強者を利する体制としてあると思うのですけれども、ガンジーの試みというのはイギリス政府が利している高所得者に対する抵抗として出てきたと思います。つまりその間には連関がないということですよ。ガンジーは低所得者を救うために、低所得者のみを救うために勝手に自分たちのコミュニティを作りあげ、運動を立ち上げていった。そういった現実もないわけではないので、これが何主義になるのかも聞いてみたいと思います。

僕が言いたいのは立場を明確に持つことと、現実にある行動のずれと、若干そういう強者・弱者の問題はデリケートな問題なので、もうちょっと厳密に考える方が良いのかなと思いました。ただこの本は学部生向けの本というので、それはもっとより突っ込んだ話は別の本の方が良いのかなと思いつつ。

(小峯) ありがとうございます。ではさっそく水溪君に。

〈学生の立場から〉

(水溪) まず結論からいうと、僕はチェックの結果、リベラリズム福祉国家型という分類になりました。僕は社会政策のゼミに所属しているので、自分では妥当な結果というか、ほっとした結果というのが正直な感想です。これにチェックをした時に、自分が人に求める倫理と、自分が個人的に実行したいという願望や信条を分類するのに、非常に苦労しました。例えば労働の問題に制限して話すと、貧困や失業を放置すべきでないという福祉国家型の思想を自分では持っているのですが、それは実際無理だろうという理由から非包摂主義というDの項目のYを選択していますし、願望のレベルでは自立的な生活を営むのが望ましいと思っていたながら、自分の信条では別のことを考えているというような非常に二重、三重の矛盾をしているという結果が出ました。これをやってみて自分の思考から純粋な倫理的な立場をとりだそうとしても、どうしてもそれが実際に実行可能なのか、ただの願望に過ぎないのではないかという疑問に制約されて、なかなか自由な思考をすることができないということを実感しました。

〈3つの質問〉

自分の立場がリベラリズムという前提で、いくつか質問させていただきます。第一に、これを言うが無知な生徒だと思われるかもしれませんが、主義と倫理的立場、イデオロギーという言葉が自分で調べてもどういう違いがあるのかというのが正直わかりませんでした。またこの本の中で倫理的立場は人に求めるものであって、社会が採用すべき倫理的指針ということが書いてありました。しかしこの本のタイトルに「あなたは何主義ですか」と問われた時は、一体どの基準によって答えればいいのかというのがよくわからなかったというのが、まず一つ目の疑問です。

二つ目は本の中で一貫した立場を形成することの重要性が述べられています。同じ「はじめに」で、人々のイデオロギーは下部構図によって既に決められているという記述がありました。この二つのイデオロギーという言葉はどんな使い分けがされているのかということを質問したいです。

三つ目は、経済倫理上の主な争点、Aの利益対道徳という対立です。創造的破壊や創造的進化の立場では、これが利益追求に分けられているのは納得できます。しかし本当に道徳と対立してしまう概念なのかというのが、自分でこれも調べたいところですが先生の考えを後でお聞かせ願いたいです。

最後に一貫した倫理の敵対的立場というのは、実際政治や国家統治に利用できて、長いこと続いた国家というのが存在したのかというのを伺いたいです。さしあたって質問は以上です。

(小峯) ありがとうございます。私は司会ですがコメンテーターの立場でもあるので、私自身もコメントさせて頂きたいと思います。まず私の立場ですけれども、実は水溪君と同じで、リベラリズム福祉国家型になりました。こう分類されてみて、非常にほっとしました。というのは、私もこの間、『福祉国家の経済思想』という本を出したので、それともし違ってネオコンだったら困るなとちょっと思いまして、非常にほっとしています。

〈本書の執筆動機？〉

いくつかコメントをさせて下さい。一つはもう少し高見に立って、橋本さんがなぜこのような本を書いたのだろうかです。コメンテーターの方にはレジメを渡してあるのですけれども、その二番目ですね。この本の最も言いたいのは、いくつかの思想・主義を分類してみて、自分なりの一貫した立場を築き、人々を説得することです。これは非常に教育的な立場かなと思いました。いろいろな政治状況を見て、政治あるいはいろいろな議論が一部の人や官庁だけによって動かされてしまっていると、そこに非常に危機感を持たれているのではないかという気がします。例えばこの間引退を表明した小泉さん、小泉政治というのは一時80～90パーセントの支持率を誇っていました。これはよく考えてみると、かなり怖いのではないかという気がします。こうしたことに対する反動として、この本の中では価値観の主体化という言葉を使いまして、自分がどのよう

なイデオロギーや主義を持っているかを明らかにする、それだけではなくてプラス・アルファとして、人と議論をする大事さを問うているということをまず皆さんに紹介しておきます。

〈一貫性？〉

その上でこれは水溪君や他の人が指摘している通り、橋本さんの前提として一貫性という言葉非常に重視しています。コンシステントという意味なのかどうかちょっと分かりませんが、これは本当にそれが可能かというのは水溪君と同じように私自身も疑問を持ちます。つまり一貫した状態というのはどういう状態なのかということが、やはりちょっと難しい。私もこれを分類する時に非常に迷いました。どっちなのだろう、いやどっちとも言えるのではないだろうかとかですね、迷いました。もう一つは倫理・エシックスという言葉自体の定義で、橋本さんは特殊な意味で使っているのではないか。つまりここでいう倫理・エシックスというのは自分の振る舞いではないですね。そうではなくて、多くの人が他人はどう振る舞うべきかという事に関して、倫理という言葉を使っています。でもそれは本当にそう正当に言えるかなと。普通倫理という言葉は自分の振る舞いというものと、他人の振る舞いというもの、あるいはミクロ・マクロどちらも考えていくのが倫理という言葉ではないかなという気がします。

本の内容に入りますけれども、橋本さんはイデオロギーと経済という言葉は、実は非常に密接に関連するのだけれども、今まであまり考慮されてこなかったと言っています。これは主流派とされる経済学自体が、割合に経済学の方法論を考えたくない、イデオロギーとか主義・主張が非常に嫌いという現状もあります。「価値自由」という概念を狭く用いているからでもあります。そのような立場を表明し、逆にいうとイデオロギーを分析する人たちは、なぜか経済学が嫌い、あるいは経済が嫌いという、何か水と油の関係だったことが今までの状態でありました。その中で「経済倫理」という分野を橋本さんが取り上げているのは、非常に新しいかなと思います。

〈リベラルの意味？〉

経済思想として、ケインズを研究している立場からコメントです。リベラルという言葉、74ページですが、そのリベラルという言葉は橋本さんは次のように使っていると思います。前近代から解放される、あるいは寛容さ、人々の愚かさを咎めないという意味でリベラルを使っている部分が多いと思います。ここでケインズの言葉を引いておきましょう。彼は「リベラル＝鷹揚さ」と主張していて、むしろ愚かさではなくて逆の方ですね。「何よりもまず例外的な人や高い望みを抱いている人に、妨げることはない機会を与える」というのがリベラル。彼はそれを非常に守りたい。ケインズはこれを「個人的自由の尊重」と言っています。愚かさを蔑むこともしないとともに、高尚な人も妬まない、むしろ心理的に支援する、そんな内容をリベラルという言葉でケインズは使っているとコメントしておきます。

〈組織と倫理〉

この本の中で自分の話題として非常におもしろかったのは、5ページの真中の30というところでした。企業の倫理性、つまり自分の属している会社、皆さんだったら学生さんですから学校、大学ですね。大学や企業、あるいは属している集団、その人たちが皆さん自身に倫理的に振る舞えというのをどこまで言えるか、という問題が非常におもしろかったと思います。例えば、学生さんが飲酒運転をしてしまう、それも自転車で運転して飲酒運転、それをたまたまミクシなどで書いてしまう。「龍谷大学一回生、この間お酒を飲んだけど、自転車で帰っちゃいました」などと書き込むと、今までは別に咎める人はあまりいなかったと思います。しかし現在はけっこう咎める人がいます。それを学校に通報する人もいます。我々の立場としては、その人たちを処分しなければいけないという問題が起こっています。例えば皆さん、落書の問題を覚えていますか。ある大学の人、確か京都だったかな、あるいは女子大だったような気がしますが、その学生たちが海外に行って、ある有名な寺院に自分の名前を書いてしまいました。大学名も。その時に大問題になって、大学の学長がわざわざイタリアまで行って謝罪する、本人も謝罪する、というような事件がありました。このような話題もあり、所属する集団がどこまでその人の倫理、やるべきことというのを規制できるのかという問題は、非常に私の問題としておもしろいと思いました。ぜひ後で本を見て頂いて、そのような問題を考えられる非常におもしろい本だなと思います。

私のコメントはここで終わらして、さてどうしましょうか。リプライをできるものがあれば、そうしましょう。はい、ではどうぞ。

〈答え〉

(橋本) それで最初に一つ、皆さんアンケートに答えもお配りしました。八類型にはまらなくても大丈夫ですので、これに入らなかったらおかしいのかなと思わないで下さい。例えば不良少年でヘビメタをやっていた人は何主義なのですかと言ったら、おそらくそれはこの中には入らないですね。支配者嫌悪主義になるのではないかと思います。例えば我が家では昔48時間連続麻雀というのをやっていた、そういう家庭で僕は赤ちゃんの頃から育ってきたのですが、じゃあギャンブラーって何主義なのだ。それは何主義かわかりません。答えてもらって恣意的に何かに分類されます。自分自身、何か生き方のポリシー、ギャンブラーとか、バイクのライダーとか。ライダーはもしかしたらリバタリアンになる可能性が高くなることもあるかもしれませんけれども。それが経済問題になるとかなり、問題がもっと単純なので、この類型の中に分類させられてしまいます。それで嫌な思いをすることもあります。

今日は皆さんにいろいろなシャープな質問をいただいて、非常にありがたく思っております。それで簡単にいいですか？ 最初に結局政治って何だろうっていうと、自己主張力のある人がいて、その人がこうした社会が良いと言って争って、権力闘争をしてある社会になっていく。国会

でどういう法案が通るということになっていくわけです。ですからまず自分の考え方を形成して、その考え方を他の人に押しつけないという人が社会を動かしてしまいます。しかし自分ももっと謙遜な人だと、自分はこういう考え方を持っているけど、他人に押しつけないなって人の方が多数だと思うのです。そういう人たちは政治を動かさなくなってしまうので、じゃあどういうところで政治がまわるのかというと、やっぱり権力闘争、自己表現力とか自己主張力が強い人が握ってしまうのです。そういう人たちに対して何とか物を申したり批判したり歯止めをかけたり、ということは民主主義の中でやらなければならない。そこで議論しなければならない。やはりそういうことですね。一番最初の村澤さんにいただいた質問に対する答えですが、でも多くの人はやはり自分の考え方、本当はこういう考え方持っているだけ、そういうふうには振る舞えないというのがほとんどだと思います。

〈二面性の罫〉

もう一つ篠原さんから、二面性を持たざるをえないというのはまさにその通りです。だからやはり悩む力が大切なのだと。自分はこう思うけれども、サークルではこういう体制に従わないといけないよなとか、サークル内は恋愛禁止だよなとか、そのような時に悩むわけです。やっぱり悩めばそれなりに考えますから、どういう社会がいいとか、どういうコミュニケーションがいいのかとか考えますので、それ自体で世の中が良くなってくると思うのです。ただ結局、権力政治というのはどっちかに動くので、これから民主党に動くか自民党に動くかという話なので、その場面でやっぱりもう一段先のことを考えなくては行けない。皆さんどこに投票するかという、やはり曖昧だから自民党でも民主党でもいいかなという、コインを振って表がでたら自民党、そういうふうな投票の仕方には実はならないのではないかと思います。

篠原さんは実は曖昧だと言いながら、僕から見ると B は X を選ばれていて、C はたぶんその時に塾で内部告発しなかったの、嫌なら辞めろとなってしまったのだ、実践的に言えばそれは X を選んだことになりますが、B は X で、C も X を選んだのではないという気がします。考えと行動は違うと言われればそうかもしれませんが。それがもし A D も選ばれていたら何か、とりあえずエイヤッと選ぶこともできたのではないかと、そういうふうに思います。

〈一貫性があるか〉

ただ最後に小峯さんからの、結局一貫性にしろと言われても、じゃ国家は一貫しているのかという一貫していません。それぞれ政権ごとに変わるし、特に福田政権の時でもう右往左往して、福田さん何をやっているのという感じだったので、あの人がどういう考え方でもって政治をしたのかよくわからないという評価になりましたよね。小泉さんの時は非常に明らかだった。小泉さんは新自由主義という考え方でやったということだと思うのです。じゃ一貫してなくていいのかという時に、最低限政権を持つ人は二年間くらい一貫して欲しいなというふうに思うのです。そうしないと評価しようがないということです。ただ私たちの考え方はどんどん変わっていきま

す。実は考えなくても人間の考え方は変わってしまいます。若い時は何か自由がいいなと思うけれども、だんだん歳と共にやっぱり何か伝統っていいなとか、若者を批判したいなと、歳とったら僕も何かガミガミ親父になってしまうのではと思います。平均的な人間で言えば若い時は自由です。歳をとったら伝統になるので、歳と共にこのアンケートに答えていくと少しずつ変わってくるでしょう。考えなくても変わってくるのです。

でもそういう普通のなあなで歳をとるのも嫌だなと思う前に、もう少し自分の生き方のポリシーを持って欲しいなと、いろいろと悩んでほしい。それはずっと一貫させろという問題じゃなくて、まず皆さん今の時点でこのアンケートで自分の立場を本当になぜ A で X を選んで、B で Y を選んだのか、その関係で理由を示せるかどうかと、何となく直感的に選んで、何でこれを自分は選んだのかについて理由が言えればそれが一貫したと言えるでしょう。一貫性は何かという定義の問題ですが、ちゃんとそれに理由が与えられたか、ということです。何でもいいです、理由は。

このように実はこのアンケートは不完全です。この本の中では第一章が今までの話で、第三章はまた別の角度から別のアンケートをしてもらうことになります。それでいろいろな角度からやってみて、更に一貫できるかどうかとがどんどん問われるようになります。結局、それらすべて一貫することは難しくなしていきます。ただ少しでも多くの理由を与えたい、与えることが今の政治をもっと良くするとか、生き方に何か、自分の生き方を変えたいとか、そう思う時に何か理由を考えることになると思います。

今までである程度答えましたが、水溪さんに対しても。リベラリズムが本当に実現可能なのか、思考を制約しているのではないかという疑問を抱かれた。でもこれが僕は大勢の意見という気がするので、一番実行可能ではないかという思います。そして創造的破壊が道徳と反するのか。素朴に僕は反すると思っているので、もう少しもしあれば教えて下さい。

〈ガンジー主義〉

ガンジー主義がありましたね。最近アニメでコードギアスのような帝国を描いた物語が話題になっていて、革命派はナショナリズムになっていく。まさにガンジーと同じように革命的な人が国家を造るのです。ただコードギアスにでてくる革命派は暴力を否定しませんが。このような話というのは、この類型の中に実はナショナリズムという領域が入ってこないのが難しいのです。ただし一つ、ガンジーならば B は X を選ぶと思うのです。なぜかという、それは貧しい人が原理的に豊かになって、しかも金持ちから財を奪い取るという。

今でいうと、何でも若い人たちが、非正規雇用やフリーターにならざるを得ない。うちのゼミでもゼミ生の半分くらいが就職に苦い経験をしている、簡単に言えばいまの40代、50代、60代という皆さんのお父さんの世代が、あまりにも正社員を独占して給料を下げたがらないのです。だから結局、給与の低い非正規雇用の若者を迎え入れようじゃないかと感じてシステムが動いている。ですからもしアルバイト料を上げたいとか、フリーターを減らしたいと思ったら、皆さん

のお父さん、お母さん世代の給料を下げなければならないのです。原理的に考える人は、立場として B は X を選んで頂きたいと思うのです。もしかしたらそれで経済成長がうまくいかないかもしれません。それでも原則的に平等であるべきなのだ。二十代の人でも正社員になるべきで、その比率はどの世代も同じようにすべきと。原理的な考えですから X になると思います。以上です。

(小峯) ありがとうございます。

それでは学生さんに訊いてみましょう。ABCD について、どの分類になったか、会場の皆さん、全員手を挙げてみて下さい。どれくらいの分布でしょうか。3 ページ目ですね。新保守主義や新自由主義があります。その前に、分類されなかった人が何主義なのかについて、たぶん質問が出ると思います。ここは八種類ありますけれども、自分がこの八に分類されなかった人、手を挙げてみて下さい。けっこういますね。わかりました。

〈少数派の分類〉

(橋本) 言ってみれば、この本の第二章は分類されなかった人が何主義になるかという分類をしているのです。ちょっと複雑なので、今日は皆さんにお配りしなかったのですが、実はこれまで YYYYY というのを選んだ人がかなりいました。それに分類された方いらっしゃいますか。すべて Y の人ね。けっこういますね。ありがとうございます。この立場には名前がありません。ないのですが、かなり多くなってきている気がします。私自身、近代卓越主義という名前を付けてみたのですが、とにかくプライドというか高貴な人はこれを選んでいるのではないかという気がします。どうしてか僕自身、直感で推測しているに過ぎないのですが。あるいは YYYX に分類された方は共和主義という名前になります。

実は私、いま京都に一月ほど滞在しておりまして、相国寺というお寺で連続講義をしました。そこでのお寺の和尚さんたちに聞きました。何になりましたかということ YXXY になったのです。これにあてはまった方いますか。学生の方でいらっしゃいませんか。とても耽美的な人、耽美的というのは美しいものが好きな人。耽美主義というふうに僕は分類したのですが、お寺の和尚さんと同じなので、和尚さん主義と名付けてもいいのではと思っています。あるいは XXXX という立場の方いらっしゃいましたか。は、いなかったですね。他の分類もあるかもしれませんが。じゃこれは何ですかという質問があればそれぞれお答えすることにします。では基本的な分類に移ります。

〈学生の分類〉

(小峯) だいたいどの辺が多数かなというのが知りたいので、はっきり手を挙げてみて下さい。八つのうちから最初からいきますね。ネオコンと言われる新保守主義になった人いますか。あんまりいない。2 人ぐらいかな。あんまりいませんね。では次の新自由主義、ネオリベラリズムと

言われています。けっこういますね。10人くらいかな。ではリベラリズムになった人。福祉国家型。やっぱりけっこういますね。15人、20人くらいかな。では四番目の国家型コミュニタリアニズムはいますか。難しいかな。やっぱりないかな。村澤さんと同じ、地域型コミュニタリアニズム。1人、2人くらいかな。自由尊重主義といわれるリバタリアニズム。これはあまり人気ないかな。1人、2人くらいかな。マルクス主義（啓蒙主義（1））ですね。これはいない。平等主義、これもけっこういますね。4、5人かな。こういう結果になりましたが、何か感想は。

（橋本） だいたい北大生と同じような。もう少しマルクス主義など、こちらではない類型があったのですが。もう少し僕の経験だと分散してもいいかなと思います。リベラリズムは半分には達していないですね。三分の一くらいリベラリズムというので、学生さんの考え方がだいたい同じようになったと思います。ただ僕がちょっとショックなのはマルクス主義がいないということ。私の世代では半分くらいマルクス主義がいてもおかしくない世代だったのですよ。20年前というのは。それがもうこれだけいないというのは、かなり時代が変わってしまったなと思いました。

（小峯） 実は統計上のバイアスの可能性があります。いま出席している学生さんは私の授業をとっている人が多い。私の講義概要には福祉や貧困というキーワードを入れているので、その意味でバイアスがかかっている、統計上のマジックもありうるので、皆さんも気をつけて下さい。つまりランダムに選ばれた学生さんじゃないわけです。そのへんの学生さんをつかまえてきたら、別の分類になっているかもしれません。

大体こんな感じになりました。後半の方はちょっと難しい話が多くあったと思います。そこではフロアの学生さんから何か質問があれば受け付けます。研究者の方もどうぞ。マイクをお渡ししますので、名乗ってから質問を受け付けたいと思います。どなたでもいいので、まず学生さん誰かいらっしゃいますか。勇気を持って発言する。ちょっと言い忘れましたけれども、出席カードがありますね。感想文カードがありますので、そこに自分の主義をはっきり私にわかるように書いておいて下さい。それで正確に後で分類して橋本先生にお届けしようと思います。誰かいらっしゃいませんか。では研究者の方からいきますか。

〈フロアからの質問1〉

（吉野裕介：日本学術振興会特別研究員 PD） 今日はおもしろい話をありがとうございました。一番大きい話をしたいと思います。学生もおられることですので。何のためにマッピングするか、を聞きたいのです。分類された自分の立場を自分でわかって、それがどのような意味を持つかを伺いたいです。僕が考えたところ、人を説得するという話もありましたけど、人がどのような主義を持っているのかを知っておくのは良いだろうと。人の主義を知ってどうなるかということ、合意というか何かを決める時に、あなたはこういう考えがあって、僕はこういう考えを持っていると。そうしたら何か決める時にその間を取ったり、どちらかを取ったりできるだろう。だから思

想のマッピングと実践の時の、どんな選択肢を取るかは、また違う段階・次元というか、一つ進んだ段階かなと思いました。先生の中ではこうしたマッピングをして、自分の主義を知ることがどういう意味を持っているのか、ということをご説明願いたいのですが。

(橋本) とてもいい質問ですね。ありがとうございます。なぜマッピングをするのかというのは、実は、それぞれその人にとって事情が異なるので、やってみて全然違う示唆を得るのではないかなと思っています。例えば学生の場合だったら、ちょっと前にブッシュ政権でイラクを攻撃したので、ネオコン批判というのが流行りました。でも実は小泉政権にせよそれ以後の政治にしても、日本社会ではネオコンが実は支配的な考えが出てきています、確実にね。そういう実は何か、ネオリベやだな、ネオコンやだなとか言っているわりにはです。具体的・実践的に、このような問題を突きつけられたら、やはりネオコンに分類をされてしまうのですよ。何となくポーズで小泉政権やだな、今の資本主義やだな、アメリカざまーみろとか言っているわりには、自分だってどっぷり資本主義につかった考え方を実践的には取らざるを得ないところがあるのです。そこを気づいて欲しいなと思います。

一般的にあまり考えていないスタンスをとっていると、そういう問題になるのですね。充分考えている人たちにとっても、実は今の左派と呼ばれる人たち、例えば右派と呼ばれる立場の人たちもそうですが、経済の問題については、全然考え方がばらばらになるのです。だから右派、左派という分類ではなく、この中で結局、例えば A について違うだけじゃないかとか、B について違うだけじゃないかとか、もっとすごく実は似ている中でちっちゃいところでいがみあったりするわけです。それがわかると仲良くなれるかもしれない。あるいは若いうちは、どんどん考え方が変わってしまいますよ。昨日はこうだったのに、明日はこれだった。昨日はこの人を好きだったのに、明日は別の、一カ月後には全然違う人を好きになっちゃった、とイデオロギーも変わっていくのですね、恋愛と同じくらい。そんな時にこんなフラフラしていいのかな、自分は結婚できるのかなみたいな、ある程度になったら落ち着きたいと思う時に、今のうちにこうしたことを思考材料として考えておくのが良いという気がします。

(小峯) ありがとうございます。他には。

〈フロアからの質問2〉

(若森みどり：首都大学東京・准教授) 八つおおまかに分類して、さらにあぶれた人はここに、私はあぶれてしまいましたが。学生さんのレジュメでは、アンケート項目があって、○か×を選ぶことになっています。けどもその新保守主義とか新自由主義リベラリズム、さらに小峯先生の授業をお受けになっているから何となくリベラリズムについて自分はこうだと、そういう認識をお持ちかもしれません。でも、残りはどういった分類なのかを解説をしてもらえると。聞いている側はちょっとわかりません。全体として、用語説明が必要ではないかと。少なくとも八つ。

〈各用語の解説〉

(村澤) 本来、途中で私が解説をはさむつもりだったのですが、アンケートや説明が非常にわかりやすかったので、ちょっと飛ばしてしまいました。済みません。その説明だけさせていただきます。ネオコン、または新保守主義(ネオ・コンサバティズム)がまず挙げられています。これは一種の国家主義といえますかね。もともと新保守主義というのは、個人主義的自由主義や多文化主義の広がりに対抗する形で、とくに1960年代以降ヒッピーブームとか個人の自由を求める風潮に対抗して登場したものです。この立場の特徴は橋本先生によれば、まず低俗文化の追放を主張する点にあります。低俗であるポルノとかそういうものは追放しろと、もっと道徳的に社会を建て直せと。また福祉に関しては、市民を国に依存させるのではなく、宗教団体とか NGO とかによって自主的にやらせろ、福祉は自発的に行なわれるべきだと主張します。さらに社会全体を道徳化することと、資本主義経済そのものを倫理化することを主張する点が特徴です。

それとよく混同されるのが、次の新自由主義(ネオ・リベラリズム)、ネオリベと言われていきます。この立場はマーケットや社会を国家が道徳的に指導するということには反対します。そうではなく市場活動は自由にさせるべきで、国家が統制するべきではないと、なおかつ福祉は減らすべきだと、そういう考え方ですね。基本的には小さな国家、国家の役割はとにかく小さく、経済企業活動の役割は大きく、そういう立場です。福祉国家がマーケットの中で非効率になったので、不安定な市場経済の特徴をもっとより効率的な形で国家の中に埋め込めと、そう主張するわけですね。ようするに小さな国家を求める考え方です。

次のリベラリズム(福祉国家)は、個人の権利と機会の平等を求める。そして政府の介入は基本的には認めない。経済活動とか社会活動に国家が介入することは認めないけれども、ただ家庭内暴力とか、犯罪とか、そういった野蛮な状態に関して国家は介入しなければいけない。国家は要するに個人の自立をまず尊重し、その条件を国家は整えるべきだけれども、かといって国家は過剰に個人の自由を侵すほどに統制するべきではないと、そういう考え方ですかね。

次の四と五が、国家型コミュニタリアニズムと地域型コミュニタリアニズムです。個人の利益よりも共同体の秩序を優先するべきだ、そういう考え方です。連帯が一番大事だと。ただ国家が重要な役割を担うかどうかで、国家型コミュニタリアニズムか地域型コミュニタリアニズムかに分かれる、と説明できるかなと思います。

次のリバタリアニズムは、自由尊重主義とか、自由至上主義というふうに訳される立場です。個人の自由を最大限に評価して、政府の介入は何であれ最小限にするべきだと。これは新自由主義と重なる点があるのですが、ただ新自由主義は秩序、つまり社会全体の善を守るためには、個人の自由というのはある程度剥奪されるべきだと考えています。リバタリアニズムは連帯が失われてもとにかく個人の自由は守らなければならない、そう考える点で新自由主義とは違ってくと説明されています。

七番目は啓蒙主義とマルクス主義です。つまり創造的な破壊や革命を重視する立場です。マル

クス主義は創造的破壊である革命によって新たな原理に基づく国家を建設して、いわゆる野蛮状態、つまり前近代的な人間関係を国家の力で消し去って、国家が経済活動の倫理的な主導者になって各個人を従属させるというか、コントロールする、そういうふうな立場とみなされます。

最後の平等主義というのは、その名の通りで全体の秩序とか全体の安定とかよりも、とにかく個人の平等が大事だと考える立場です。特に経済的な平等ですかね。機会の均等よりは結果の均等を重視する立場といって良いのかな。とにかく私有財産は認めるのだけれど、そしてこの点がマルクス主義や共産主義と違うところですけども、市場社会、資本主義経済の中で貧富の平等をとにかく目指す。平等のためには全体がどうなってもかまわんという、そういう考え方でしょうか。こういう簡単な説明でよろしいですかね。これら八つの立場については本に詳しく書いてあるので、また購入されて説明を読んでみてください。

〈おわりに〉

(小峯) ありがとうございます。まだまだ質問を受け付けたいのですが、そろそろ締めに入らないといけません。学生さんは自分の分類をはっきりしたうえで、何か今日の感想あるいはわからなかった点とか、質問したかった点を二、三行でもいいですので書いて下さい。できれば橋本先生に全部そのままお届けしようかなと思っています。今日のお話はちょっとかなり難しかった部分も多いと思います。でも一番言いたいのは皆さん自身が自分の主義、主張が本書を使ってまず分類されてしまい、自分の主義、主張、イデオロギーとは何かというのを発見する過程であったのではないかと思います。その中で経済思想、あえて経済とイデオロギーとの関係ということでトピックは選ばれています。非常におもしろいトピックがいろいろあります。皆さんに関係のあるフリーターの話とか年金の話とか、そういうかなり具体的な話からもっと深い何々主義、啓蒙主義であるとかリベラリズムとか、そういうちょっと難しげだけれども、やはり非常に関係のある主義、主張が分類されていって、それがどういうものであるかということがわかってきます。

私の感想を一つ述べておくと、最初リベラリズムに私は分類されてほしかったと言ったのですが、逆にちょっとがっかりした部分もありまして。というのも私も橋本さんと同じかもしれませんが、基本的に天の邪鬼なのですね。普通の人、多数にはなりたくないのですね。それでリベラリズムの考え方が多数だと知って非常に愕然と私はしました。本当はもっと投資でいえば逆バリといいまして、主義・主張が多数じゃないところを、少数派を狙っていましたが、残念ながら多数派に分類されてしまいました。それが非常におもしろい、意外性がありました。このように自分を再発見できるという点で、この本は非常におもしろい本かなと思います。

今日は龍谷大学大学院・経済学研究科の主催で橋本努先生をお招きしました。そしてコメンテーター三人をお招きして、主に学生さん・院生さん向けに講演・合評をしてみました。ここで一旦終了しますが、その後何人か講師の方は残っていますので、もし具体的にもう少し質問してみたいという学生さんがおられましたら、ちょっと残っておいて下さい。最後に出席カー

ドを提出して、普通の人は帰って終わりにしたいと思います。拍手をもってお送りしたいと思います。橋本さんありがとうございました。他のコメンテーターの方もありがとうございました。ではこれで終わりにしますので、学生さんは受け付けの所で回収しますので、カードを提出して下さい。

(受付 2009年1月19日)